
静南高校バスケットボール部

鳴海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

静南高校バスケットボール部

【Nコード】

N6440Y

【作者名】

鳴海

【あらすじ】

静南高校で出会った朝倉隼人と村沢薫。終生のライバルと呼ばれ、日本バスケット界を大きく動かす2人が辿ったストーリーとは…。

ストーリーはオリジナルですが、若干スラムダンクと内容が被ります。

Episode 1 バスケットボール

静南高校

「うおっ、でけえ…」

「俺たちと同じ1年か？」

埼玉県の静南高校。ここで入学式を終え、1人の新入生が注目を集めていた。

朝倉隼人

中学まで北海道のバスケット部に在籍していたが、父親の仕事の都合により埼玉に引っ越してきた。

朝倉（バスケット部あるよな…）

朝倉が掲示板の前で立ち止まる。

“バスケット部、王者東王に完敗。またもや八強の壁破れず”

朝倉「おつ、バスケ部か。しかも八強って結構強いのか？」
村沢「強いよ」

背後から声。朝倉が振り返る。そこには短髪で端正な顔立ちをした長身の男が立っていた。

村沢「キャプテンでセンターを務める二階堂さん、精密機械のようなシューティングを誇る如月さん、スピードスターと呼ばれる金村さん。この3人は全国でもトップクラスの實力なんだけど、控えの選手層が薄いのがベスト8に甘んじている原因さ」

朝倉「ええつと…」

村沢「ああ、すまない。5組の村沢薫っていうんだ。もしかして埼玉出身じゃないのか？」

朝倉「2組の朝倉隼人だ。中学まで北海道にいたんだけど、親の都合で埼玉に来たんだ。村沢くんはどうしてこの学校に？」

村沢「薫でいいよ。二階堂さんは中学の頃の先輩でね、スカウトされて来たんだ。バスケ部に入るつもりなら、一緒に体育館に行こうぜ」

朝倉「ああ、分かった。これからよろしくな、薫。俺は隼人でいいよ」

村沢「分かった。よろしく、隼人」

Episode 2 入部

体育館に向かって歩く朝倉と村沢。大男が並んで歩くので、反対方向から来る新人生は道をあけるように避けてしまう。

田中「隼人くん！」

背後から何者かが朝倉の肩を叩く。朝倉と村沢が振り向くと、ポニテールの女子生徒が立っていた。

田中「久しぶりね」

朝倉「あっ！お前、もしかして保奈美か！？」

田中「うん。小学校の卒業式以来ね」

村沢「隼人、この美人さんは？」

朝倉「ああ、俺の幼なじみの保奈美だ。そっか、確か中学から埼玉に行くって話だったな」

田中「ふふっ、入学式で隼人くんを見た時はびっくりしちゃった。けど昔と変わらず大きいからすぐ分かっちゃったよ」

村沢「村沢薫です。よろしく、田中さん」

田中「あつ、田中保奈美です。よろしくお願いします」

朝倉「悪いな、保奈美。俺たち、これから体育館に行くんだ。話はまた明日な」

田中「そう言うと思った。バスケ部に入部するんでしょ？じゃあ、私も一緒に行く」

朝倉「は？」

田中の言葉が理解できない朝倉。

田中「私、バスケ部のマネージャーになるから」

朝倉「…は？」

田中「ささっ、早く体育館に行こうよ。先輩たちに怒られちゃうよ」

朝倉「お、おい…！待てって…！」

朝倉と村沢は田中に押されて体育館に向かった。そして、3人は体育館にやって来た。もうほとんどの新入部員が集まっている。

朝倉「もう結構集まっているみたいだな」

村沢「ああ、いい雰囲気だ」

田中「ふふっ、楽しみだね」

そこにキャプテンの二階堂、副キャプテンの相川がやって来た。

二階堂「おう、二階堂。遅かったじゃないか。よく来てくれた」

相川「久しぶりだな、村沢」

村沢「キャプテン、相川さん、お久しぶりです。またお世話になります」

朝倉と田中は二階堂を見て、驚きを隠せない。

朝倉（で、でけえ…。2mはあるんじゃないか…）

二階堂「ん？お前も新入生か？身長は村沢よりあるが…。中学はどこ出身だ？」

朝倉「は、はい！北海道の花隈中学出身です！これからよろしくお願いします！」

二階堂「ん、期待してるぞ」

二階堂の視線が田中に移る。

二階堂「村沢、この娘は？」

村沢「朝倉の幼なじみです。マネージャー希望ですって」

田中「は、初めまして！田中保奈美です。よろしくお願いします」

二階堂「ああ、マネージャーなら大歓迎だ。よろしく、田中さん」

二階堂が手を叩く。

二階堂「よーーーーーっし！新入部員は全員並べ！」

一列に並ぶ新入部員たち。前には二階堂、相川が立っている。

二階堂「キャプテンの二階堂剛士だ。まずはじめに言うておく。ウチは本気で全国制覇を目指している。半端な者はいらん。しっかりついてきてくれ」

相川「副キャプテンの相川です。全国に行くには君たちの力が必要だ。これからよろしく頼むよ」

二階堂「じゃあまずはお前たちの力を見ておきたい。そこで俺たちレギュラーとお前たち新入部員でゲームをしようと思う。各自ストレッチをし、ゲームに出る者はビブスを受け取るように」

相川「田中さん、ここに名前書いてる人にビブスを配ってくれるかい？レギュラーは赤、新入部員は緑で」

田中「はい！」

各自ストレッチを終え、田中からビブスが配られる。

田中「はい、隼人くん、村沢くん」

村沢「ありがとう」

朝倉「え？俺、ゲームに出るの？」

田中「うん。頑張ってね」

朝倉「あ、ああ…」

村沢「まさかいきなり隼人と一緒にプレーできるとはね」

朝倉「そうだな。よろしく頼むな、薫」

同じゲームに出る他の1年生も集まった。

原口「僕は原口亮介。これからよろしく頼むよ」

大栄「大栄圭一です。よろしく」

若菜「若菜伊織。これから3年間、頑張ろうぜ」

朝倉「あつ、俺は朝倉隼人。やるからには絶対勝とうな」

村沢「村沢薫です。よろしく」

大栄「知ってるよ、有名人」

若菜「まさか中学MVPの人間と同じ学校になるとはな」

朝倉「ちゅ、中学MVP!？」

朝倉が村沢に目を向ける。微笑む村沢。

朝倉（中学MVP…。そんなすごい奴だったのか…）

ピーーーーー！

「始めます!」

両軍メンバーが顔を合わせる。二階堂がセンターサークルに入った。

村沢「隼人、君がいきなよ」

朝倉「え?でも…」

村沢「いいからいいから。君は俺よりでかいし、実力を見てみたいんだ」

朝倉「…分かった」

朝倉もセンターサークルに入る。他の8人がサークルを囲った。

二階堂「朝倉、遠慮はいらん。全力でかかって来い」
朝倉「…はい！」

Episode 3 激突！レギュラーVS新入生

審判がボールをトス。二階堂と朝倉が跳んだ。

朝倉「おっ……！」

二階堂「む！？」

村沢「……………！！！」

周囲が驚く。

「おおおおお！」

「高……………い！」

バシイ！

ジャンプボールは二階堂が僅かに競り勝ち、如月がボールを拾った。
レギュラーチームのボールで試合開始。

如月「あの1年、なんてジャンプしやがる……」

金村「二階堂さんとはば互角かよ……」

二階堂（朝倉隼人か……）

赤ビブス

- 4 ・二階堂剛士（C） / 3年 / 197 c m
- 5 ・相川修一（SF） / 3年 / 177 c m
- 6 ・金村徹平（PG） / 2年 / 167 c m
- 7 ・如月慧（SG） / 3年 / 184 c m
- 8 ・塚間健（PF） / 3年 / 184 c m

緑ビブス

- 4 ・村沢薫（PF） / 1年 / 188 c m
- 5 ・大栄圭一（PG） / 1年 / 170 c m
- 6 ・原口亮介（SG） / 1年 / 176 c m
- 7 ・若菜伊織（SF） / 1年 / 178 c m
- 8 ・朝倉隼人（C） / 1年 / 190 c m

ボールは如月から金村へ。村沢が朝倉に声をかける。

村沢「驚いたよ。すごいジャンプ力だな」

朝倉「いや、大したことないよ。それよりディフェンスだぞ」

村沢「ああ」

（隼人、彼となら本当に…）

金村がゆっくりとボールをついている。目の前に立つのは大栄。

大栄（金村さん…。全国でもトップクラスのPG…）

金村「行くぜ、1年」

金村、カットイン！大栄をあっさり抜いた。

大栄（は、速すぎ…！）

気がついたらゴール下。朝倉が前に出てくる。

スッ

金村、フリーの二階堂へパス。二階堂は冷静にシュートを放つ。

バス！

「おおおお！金村！」

「キャプテン！ナイッシュ！」

バチン！

静かに手を叩く二階堂と金村。そして、ディフェンスに入る。

二階堂「よーーーーっし！ディフェンス！」
「おう！ー！」

朝倉がボールを拾う。

大栄「ご、ごめん…」

村沢「ドンマイ。次はオフェンスだ」

1年チームの攻撃。大栄がボールを運ぶ。

金村「来いや、1年」

大栄（朝倉でいくか？いや、まずはやっぱり…）

大栄、ハイポスト付近へパス。ボールは村沢に渡った。

「村沢！」

「村沢だ！」

村沢がボールを持った瞬間、レギュラーチームの目つきが変わった。

如月（村沢…）

二階堂（成長したところを見せてみる、村沢）

村沢、ドライブ！こちらにもあっさり塚間を抜いた。

塚間（え…！？）

朝倉「……………！！！」

相川がヘルプに入る。村沢はこれも抜いてシュートを放った。

ザシュ！

「村沢！いきなり決めたぞ！」

「相川さんと塚間さんを相手に！」

如月「二階堂、お前の言ってた通りだ。本物だな、奴は」

二階堂「ふつ、まだまだ。あいつはあんなもんじゃないぞ？」

朝倉は村沢のプレーを見て鳥肌が立っていた。

朝倉（薫…。これが中学MVPの実力…。こいつと3年間、一緒の学校でプレーできるなんて…！）

Episode 4 静南高校監督

試合は全国でもトップクラスの实力を誇る二階堂、如月、金村を擁するレギュラーチームの優勢で進んだ。1年チームも村沢の奮闘で得点を重ねるが、チーム力の差は明らかだった。

前半終了

赤 2 7

緑 1 4

緑ベンチ

村沢「ふうう、強いな」

朝倉は頭からタオルをかぶっている。

朝倉（くそっ、まるで歯が立たなかった…）

朝倉にドリンクを差し出す村沢。

村沢「隼人、気にするな。むしろ君はキャプテンを相手によくやってるよ」

朝倉「薫…」

村沢「後半、絶対巻き返そうな」

朝倉「おう！」

赤ベンチ

如月「どうだ、二階堂。あの朝倉は」

二階堂「まだ荒削りではあるが、いい選手だ。パワーもある。鍛えれば化けるぞ、あれは」

如月「へえ、お前にそこまで言わせるとはな。楽しみな1年だ」

金村「あの村沢もやっぱりバケモンっすね。10分で10得点」

如月「ああ、そうだな。後半は俺が直接ついてやるよ」

二階堂「いいか、お前ら！相手は1年、負けたらグラウンド50週だ！全力で叩き潰すぞ！」

「おう！！！！」

ピーーーーー！！

「後半始めます！」

両軍メンバーがコートに入る。

ガラガラ

その時、体育館の扉が開いた。

室井「おう、やってるな」

一斉に頭を下げる部員たち。

「チユーーーーース！」

2年生が1年生に声をかける。

「監督の室井先生だ。挨拶して！」

「チユ、チユーーーーース！」

ゆっくりとベンチに向かう室井。二階堂が室井に駆け寄る。

二階堂「先生、また釣りですか？今日だけは遅れるなどあれば…」

室井「すまんすまん、大物がかかって熱くなっちゃった。逃げられただけだな。はっはっは！」

二階堂「ったく…」

二階堂が仕切り直しと手を叩く。

「二階堂」よーーーーっし！後半始めるぞ！」

ベンチに腰かける室井。

室井「さうて、じっくり見させてもらっかな」

Episode 5 熱戦

後半開始。一進一退の攻防が続く。

ザシュ！

「おおおお！如月さん！」

「今日3本目のスリーポイントだ！」

バス！

「1年チームも返した！」

「村沢もすげえ！ナイスパスだ！」

ドガア！！！！

「うわああああ！キャプテンのダンク！」

「朝倉をふっ飛ばした！バスケットカウント！」

残り時間3分

赤 4 1

緑 2 6

1年チームの攻撃。朝倉にボールが入る。

二階堂「来い、朝倉！」

朝倉、高速スピントーン。二階堂を振り切る。

田中「やった！」

室井「やるな。だが…」

朝倉、シュートへ。そこへ二階堂が跳んできた。

朝倉「げっ…！」

二階堂「甘いわ！」

バシイ！

二階堂のブロックが炸裂。金村がボールを拾い、ゴールに駆けあがる。

室井（スピード、パワーは上々だ。あとは経験か…）

バス！

金村のワンマン速攻が決まる。

朝倉「くそっ…」

膝に手をやり、頭を下げる朝倉。

田中「隼人くん！」

田中が突然大声を出す。部員たちの視線が田中を集まる。

田中「負けないで！」

朝倉が頭を上げる。そして、田中に向かって小さく拳を握る。

朝倉「分かったぜ、保奈美。絶対勝つ！」

その時、体育館を歓声が包んだ。

「ヒューーーーーっ！」

「おいおいおい！2人は公認の仲か？」

朝倉と田中は恥ずかしそうに頬を赤く染める。村沢が朝倉の尻を叩いた。

村沢「かつこ悪いところは見せられないな、隼人」

朝倉「お、おう！」

二階堂（俺の立場は…）

1年チームの攻撃。大栄がボールを運ぶ。

大栄（これ以上離されるわけにはいかない。なんとか村沢に…）

バシイ！

大栄「あっ…！」

金村「よそ見してんじゃねえ！」

金村のスティールが炸裂。如月が走る。

如月「金村！」

金村「はいよ！」

金村、前方へ大きなパス。しかし、村沢が追っている。

「村沢！」

「速い！よく戻っていた！」

如月、急ストップ。

村沢「……………！！！」

村沢は全力で追っていたためストップが利かない。如月、ミドルレンジからシュートを放った。

村沢「くっ…！」

村沢が懸命に手を伸ばす。

チッ！

村沢の指先にボールが当たり、軌道が変わる。

如月「なに!？」

（触りやがった…!）

室井（かなりの脚力だな。あそこから触れるとは）

如月が叫ぶ。

如月「外れる!リバウンド!」

二階堂「おう!」

ガシイ!

二階堂「……………!？」

室井「……………!!」

朝倉、完璧なスクリーンアウト。二階堂にポジションを渡さない。

ガン！

ボールがリングで跳ねる。朝倉と二階堂が跳んだ。

バシイ！

朝倉「おっしゃああああ！」

「おおおお！」

「朝倉！ナイスリバン！」

田中「隼人くん！」

二階堂（こいつ…！）

村沢「隼人！」

朝倉、前方の村沢へ剛速球パス。村沢は完全にノーマーク。

朝倉「行けえ！」

ドガァ……！！

「うおおおお！ Dankだ！」
「ぶちかましたーーーー！」

朝倉・村沢「しゃああああ！」

バチン！

朝倉と村沢の力強いハイタッチ。

村沢「さあ！ ディフェンスだ！ 1本止めるぞ！」
「おう！ ！」

二階堂、相川、如月が思わず微笑む。

二階堂「ふつ、こいつら……」
相川「心強いじゃないか」
如月「ああ」

室井も同じ表情をしていた。そして…。

ピーーーーー！

試合終了

赤 4 8

緑 3 5

室井が手を叩いてコート上に入る。

室井「ナイスゲーム！見応えのある試合だったな」

村沢「ありがとうございます」

村沢以外の1年チームは口を開く気力もない。

如月「お疲れのところ悪いが…」

二階堂「負けたチームはグラウンド20週だ。行つてこい！」

原口「ええっ!？」

朝倉「き、聞いてないですよ!？」

二階堂「お前らが聞かなかったからだ。さあ、行け!10週追加するぞ!」

田中が朝倉の腕を引っ張る。

田中「さあ、頑張つて!」

朝倉「お前…!他人事だと思つて!」

村沢「はははっ、仕方ないさ。行こうぜ」

朝倉「くそっ…」

ランニングに向かう5人。ゲームに出ていない新入部員は知らん顔している。

二階堂「バカモン！なにをしとる！お前らもだ！」
「は、はい！！！」

他の新入部員も慌てて体育館を出る。

室井「嬉しそくだな、二階堂」
二階堂「先生こそ」

朝倉と村沢を先頭に走っている新入部員たち。朝倉が悔しそうに大声を出す。

朝倉「くっそっ！次は絶対負けねえぞ！」
村沢（インターハイ予選、必ず勝つ。隼人とならきつと…！）

Episode 6 食堂にて

静南高校食堂

朝倉「うめ〜！やっぱり食堂のカツ丼は最高だぜ！」

田中「ほら、シャツに汚れついちゃった。もう、いつまでも子供な
んだから」

食堂で昼食をとっている朝倉と田中。そこに村沢と大栄がやって来
た。

村沢「お熱いところ恐縮だけど、前座つていいかい？」

朝倉「おお、薫に大栄。もちろんいいぞ」

村沢と大栄が席につく。

大栄「…すごい食欲だね。ラーメンにカツ丼にサンマ…」

朝倉「サンマ1匹いるか？」

大栄「いや、遠慮しとくよ」

朝倉「そうそう、薫に聞きたいことがあるんだ」

箸で村沢を指す朝倉。田中が朝倉の手を叩く。

田中「もう！箸で人を指さない！」

村沢「まあまあ。それでなに？」

朝倉「俺たち、入部してから2週間経ったよな？で、ずっと気になつてたんだ」

村沢「うん」

朝倉「キャプテン、如月さん、金村さんがいる静岡はどうしてベスト8止まりなんだ？相川さんも塚間さんも足を引っ張ってるようには見えないし、いくらベンチ層が薄くても決勝リーグに行くだけの实力はあると思うんだけどさ」

村沢と大栄が顔を見合わせる。

大栄「…そうか。朝倉は北海道から来たんだったね」

村沢「分かった、説明しよう。君の言う通り、この静岡は他校に比べて頭一つ、二つは抜きん出てる。いや、全国でも勝てる實力は十分あるだろう」

朝倉「だろ？どう考えてもおかしくないか？」

村沢「けど、それは他県だったらの話だ」

朝倉「……………！？」

村沢「この埼玉には全国でもトップクラスの学校が3校あるんだ。まずは14年連続で王者に君臨する東王。超高校級PGの帝幸雄が率いる高校さ。名実ともに埼玉No.1プレイヤーで、帝というその名前から“皇帝”と呼ばれている」

朝倉「東王…」。去年の冬でウチが負けたところか」

大栄「次にこちらも14年連続No.2の翔蘭学院高校、通称“摩天楼軍団”。去年インターハイでベスト4の成績を残した東王に対し、こちらはベスト8。当時のスタメンは全員2年生で、今年は去

年のメンバーとまったく同じ。ちなみに4人の大男を操るキャプテンの加賀美総吾は帝と肩を並べるほどのPGさ」

村沢「そして最後の1校。全国未出場ながら埼玉2強を倒すのはそこしかないと言われている光林高校。ここには帝、加賀美にも匹敵する天才がいるんだ」

朝倉「天才…？」

釣りをしている室井。片手には携帯を持っている。

室井「ん、じゃあその時間で。うん、はいよ。じゃあな、かつちやん」

室井が電話を切った。その表情はどこか楽しそうである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6440y/>

静南高校バスケットボール部

2011年11月28日00時48分発行